

二つの『單字解』(下)

竹越 孝

(承前)

4. 内容の異同

次に、乙亥字本と朴通事本の内容面における異同を一覧の形で示す。李丙疇(1967)には乙亥字本の影印が不鮮明であるため付された翻字の部分があるので(声点については省略されている)、乙亥字本については翻字と影印を対象とする。カッコ内の出現箇所は葉数・表裏・行数・左右・字数の順に記す。ハンゲルのローマ字転写は河野式による(ただしアレアはAで表す)。

No.	項目	乙亥字本		朴通事本	備考
		翻字	影印		
(1)	料	凡人 (1b3 右 16-17)	凡人 (1b3 右 16-17)	漢俗 (1a11 右 16-17)	
(2)	彈	瓜 (1b5 右 12)	瓜 (1b5 右 12)	瓜 (1b2 右 8)	翻字誤
(3)	撒	zin (1b7 左 11)	zin (1b7 左 11)	'in (1b4 左 3)	
(4)	扯	抉 (2a1 右 5)	抉? (2a1 右 5)	扶 (1b6 右 12)	影印不鮮明 朴通事本誤?
(5)	俚	言語 (2a3 右 15-16)	言語 (2a3 右 15-16)	語 (1b8 右 19)	
(6)	乾	gong (2a9 右 12)	gong (2a9 右 12)	gyng (2a2 左 19)	
(7)	挨	'ai (2b1 左 18)	'ai? (2b1 左 18)	'ai (2a4 右 8)	翻字誤? 中村(1967)参照
(8)	怕	mid (2b4 右 7)	mid (2b4 右 7)	mis (2a6 右 13)	
(9)	怕	mod (2b4 右 9)	mod (2b4 右 9)	mos (2a6 左 1)	
(10)	咱	們 (3a7 右 9)	們 (3a7 右 9)	文 (2b6 右 9)	
(11)	箇	'i (3a9 左 15)	'i? (3a9 左 15)	'e (2b8 左 7)	影印不鮮明

(12)	那	nyi (3b2 右 1)	nyi (3b2 右 1)	? (三) (2b9 左 5)	朴通事本不明
(13)	的	委的 (3b4 左 1-2)	委的 (3b4 左 1-2)	的實 (2b11 左 9-10)	
(14)	勾	去聲 (4a2 右 4-5)	去聲 (4a2 右 4-5)	× (3a6 左 11-12)	
(15)	勾	又 (4a2 左 2)	又 (4a2 左 2)	俗語謂 (3a6 左 17-19)	
(16)	勾	當亦 (4a2 左 5-6)	當亦 (4a2 左 5-6)	勾當並 (3a7 右 2-11)	
(17)	打	dyd (4a3 右 15)	dyd (4a3 右 15)	dys (3a7 左 19)	
(18)	打	gid (4a3 左 3)	gid (4a3 左 3)	gis (3a8 右 5)	
(19)	將	ryr (4a5 左 5)	ryr (4a5 左 5)	rAr (3a9 左 12)	
(20)	把	抱 (4a6 右 3)	把 (4a6 右 3)	把 (3a10 右 14)	翻字誤
(21)	把	ryr (4a6 右 8)	ryr (4a6 右 8)	rAr (3a10 右 19)	
(22)	把	ryr (4a6 右 14)	ryr (4a6 右 14)	rAr (3a10 左 6)	
(23)	來	ri (4a8 左 3)	ri (4a8 左 3)	ni (3b1 左 5)	
(24)	怎	jAn (4a9 右 18)	jA? (4a9 右 18)	jA (3b2 右 18)	影印不鮮明
(25)	怎	文 (4b1 右 18)	之? (4b1 右 18)	之 (3b3 右 14)	影印不鮮明
(26)	討	re (4b6 右 7)	re? (4b6 右 7)	ra (3b7 右 16)	影印不鮮明
(27)	討	bid (4b6 右 13)	bid (4b6 右 13)	bis (3b7 左 9)	
(28)	討	dA (4b6 右 17)	dA (4b6 右 17)	dy (3b7 左 13)	
(29)	討	bid (4b6 左 6)	bid (4b6 左 6)	bis (3b7 左 20)	

(30)	討	bid (4b6 左 17)	bid (4b6 左 17)	bis (3b8 左 3)	
(31)	索	bad (4b7 右 10)	bad (4b7 右 10)	bas (3b8 右 16)	
(32)	索	bid (4b7 右 18)	bid (4b7 右 18)	bis (3b8 左 13)	
(33)	便	god (4b9 右 3)	god (4b9 右 3)	gos (3b10 右 7)	
(34)	便	god (4b9 右 8)	god (4b9 右 8)	gos (3b10 右 12)	
(35)	往	ga (5a7 左 7)	ga? (5a7 左 7)	da (4a5 左 17)	影印不鮮明
(36)	恁	恁 (5a8 右 6)	您 (5a8 右 6)	您 (4a6 右 12)	翻字誤
(37)	快	筋 (5a9 左 1)	筋 (5a9 左 1)	筋 (4a7 左 5)	翻字誤
(38)	越	ug (5b4 左 16)	ug (5b4 左 16)	og (4a11 左 11)	
(39)	就	jai (5b6 右 3)	jai (5b6 右 3)	jei (4b1 右 17)	
(40)	就	god (5b6 左 10)	god (5b6 左 10)	gos (4b2 左 1)	
(41)	虧	nad (5b7 右 16)	nad (5b7 右 16)	nas (4b2 左 18)	
(42)	虧	nad (5b7 左 8)	nad (5b7 左 8)	nas (4b3 右 6)	
(43)	使	了 (6a1 右 10)	了 (6a1 右 10)	也 (4b5 右 18)	
(44)	使	使臣差使 (6a1 左 10-13)	使臣差使 (6a1 左 10-13)	將命曰使 (4b5 左 15-18)	
(45)	趨	ha (6b7 左 9)	hA (6b7 左 9)	hA (4b10 左 5)	翻字誤 中村 (1967) 參照
(46)	頭	cien (7a3 右 13)	cien (7a3 右 13)	jien (5a3 左 4)	
(47)	到	rA (7a4 左 10)	rA (7a4 左 10)	ro (5a4 左 13)	

(48)	偌	甚 (7a8 右 5)	甚 (7a8 右 5)	息 (5a7 右 20)	
------	---	----------------	----------------	-----------------	--

5. 内容の異同に対する検討

5. 1. 翻字

以上の 48 箇所にあたる異同のうち、李丙疇（1966）の翻字に問題があると認められるのは 6 例（2、7、20、36、37、45）である。このうちハングルの字形に関する（7）と（45）の 2 例は中村（1967）において指摘がなされたものであるが、（7）は影印が不鮮明であり、筆者自身はそれと確認できない。他の 4 例はいずれも漢字の字形を見誤ったものと思われる。

5. 2. 漢字の異同

漢字部分の異同に関しては、それぞれを文脈の中に置いた方が正誤の別や修訂の意図が明確になると思われるので、煩を厭わず前後の関係箇所を引用することとする（影印不鮮明とした例は除く）。引用の【乙】は乙亥字本、【朴】は朴通事本を表し、異同箇所には下線を施す。

- (1) 【乙】料：凡人飼馬，或用小黒豆，或用蜀黍雜飼之。(1b3-4)
【朴】料：漢俗飼馬，或用小黒豆，或用蜀黍雜飼之。(1a11-1b1)
- (5) 【乙】俚：…凡言語有用 ri 音爲語助者，皆用裡里俚哩等字。(2a3-4)
【朴】俚：…凡語有用 ri 音爲語助者，皆用裡里俚哩等字。(1b8-9)
- (10) 【乙】咱：…們字初聲爲合口聲，鄉習以們字初聲連咱字之終讀之，故咱字亦似合口聲之字，遂以咱字爲合口聲。(3a6-8)
【朴】咱：…們字初聲爲合口聲，鄉習以文字初聲連咱字之終讀之，故咱字亦似合口聲之字，遂以咱字爲合口聲。(2b5-6)
- (13) 【乙】的：…吏語，的確、的當、虚的、委的。(3b2-3)
【朴】的：…吏語，的確、的當、虚的、的實。(2b11)
- (14-16) 【乙】勾：…又去聲，勾當，幹管也，又事也。當亦去聲。(4a2)
【朴】勾：…又勾當，幹管也，俗語謂事也。勾當並去聲。(3a6-7)
- (43) 【乙】使：…又用也，使用了。(6a1)
【朴】使：…又用也，使用也。(4b5)
- (44) 【乙】使：…又去聲，使臣、差使。(6a1)
【朴】使：…又去聲，將命曰使。(4b5)
- (48) 【乙】偌：太甚也。(7a8)
【朴】偌：太息也。(5a7)

以上の 8 例のうち、(5)、(10)、(43)、(48) の 4 例は朴通事本の方に問題があると思われるものである。まず(5)は乙亥字本の“言語”を朴通事本では“語”

に作るが、“言語”は「話し言葉」の意味であるから“語”だけでは意味が通じない。(10)は“咱”に鼻音韻尾が生じるに至った過程を考証した部分だが、乙亥字本で“咱”の終声と“們”の初声の連音と説明しているところ、朴通事本では“們”を“文”に作ることにより、「文という字」の意としても「文字」の意としても通じない。(43)の乙亥字本における“使用了”は、『單字解』の叙述形式からすると“使”を“用也”の意味で用いた例として理解されるが、朴通事本では“使”に“用也”と“使用也”という二つの意味があると説明していることになり不合理である。(48)では、乙亥字本の“太甚”は「甚だ」であるが、朴通事本の“太息”は「ため息」であるから“偌”の意味として相応しいのは前者である。

その他の(1)、(13)、(14-16)、(44)の4例は両本いずれでも文意が通るものである。(1)では馬の飼育方法について、乙亥字本は人一般のこととし、朴通事本は漢族の風習とする。(13)では吏語として乙亥字本は“委的”を、朴通事本は“的實”を挙げる。(14-16)では“勾當”の意味として、乙亥字本は“幹管”と“事”を並列するが、朴通事本は後者を通俗的な言い方と見なしている。(44)では去声の場合の“使”について、乙亥字本は例を挙げるのみであるが、朴通事本は「命を奉じること」という意味の説明がなされている。こうした例は、どちらかの系統が意をもって改訂したことを物語るものであろう。

5. 3. ハングルの異同

ハングル部分の異同については、筆者は門外漢であるため朝鮮語史研究の立場から正誤や修訂の意図を詳しく論じることができないが、特に目立つ傾向を二つほど取り上げてみたい。

上表中で最も多いハングルの異同は、乙亥字本の終声 d を朴通事本では s に作るケースであり、全部で 14 例ある。内訳は、bid : bis が 4 例 (27、29、30、32)、god : gos が 3 例 (33、34、40)、nad : nas が 2 例 (41、42)、mid : mis、mod : mos、dyd : dys、gid : gis、bad : bas が各 1 例 (8、9、17、18、31) である。

終声の d と s をめぐる正書法の変遷について、李基文 (1975 : 220) の説くところによれば、15 世紀の段階ではこの二つの終声は厳密に区別されていたが、16 世紀後半からこの区別が崩れ始め、17 世紀には二つの終声の選択が恣意的となり、18 世紀からは d がなくなり s だけに統一される傾向が現れたという。これによると、表記としては 16-18 世紀の間に d, s > s と変化したことになり、上に見た乙亥字本と朴通事本の異同は、乙亥字本の系統における d の表記を朴通事本の系統が s に改めたと解釈することが許されよう。即ち、ここから乙亥字本の系統の方が古形を存していると推定できることになる。

この他に、母音 A に関わる異同が 5 例ほどあり、その内訳は乙亥字本の y を

朴通事本で A に作るものが 3 例 (19、21、22)、乙亥字本の A を朴通事本で y に作るものが 1 例 (28)、乙亥字本の A を朴通事本で o に作るものが 1 例 (47) である。関係箇所を引用すると以下の通り。

- (19) 【乙】將：…把咱們 u-ri-ryr ta-ga. (4a5)
【朴】將：…把咱們 u-ri-rAr ta-ga. (3a9)
- (21) 【乙】把：…把我們 u-ri-ryr ta-ga. (4a6)
【朴】把：…把我們 u-ri-rAr ta-ga. (3a10)
- (22) 【乙】把：…把來 gy-ryr ta-ga. (4a6)
【朴】把：…把來 gy-rAr ta-ga. (3a10)
- (28) 【乙】討：…討債去 bid ju-ni ba-dA-ra ga-da. (4b6)
【朴】討：…討債去 bis ju-ni ba-dy-ra ga-da. (3b7)
- (47) 【乙】到：…又反辭, do-rA-hie. (7a4)
【朴】到：…又反辭, do-ro-hie. (5a4)

李基文 (1975 : 157-158, 226) によれば、母音 A は 15-16 世紀に非語頭音節で A > y または A > o の変化を、また 18 世紀に語頭音節で A > a の変化を蒙ったというが、上の諸例からは一定の方向性を読み取ることができないので、両本の段階ではなお母音 A の使用に揺れがあったと考えられる。

6. おわりに

上に挙げた内容面の異同のうち、両本の系統的な新旧を論じる際に有効な論拠となりうるのは終声の d と s の問題であり、これによると乙亥字本の系統の方が古く、朴通事本の系統はそれを改訂したものと認めることができる。これに、前稿で述べた『單字解』には現存の 9 行本と異なる 10 行本が存在したという推定を考え合わせるならば、次のような結論を導き出すことができよう。即ち、最もオリジナルに近い形の『單字解』は 9 行本であり、後にこれに基づく 10 行本が作られ、朴通事本が依拠したのは 10 行本であった、というものである。

なお、朴通事本に見られる種々の改訂が 10 行本が作られる段階でなされたものか、朴通事本が作られる段階でなされたものかはわからない。この問題は、同じく二種類のテキストが存する『老乞大集覽』及び『朴通事集覽』についても詳しく検討した上で考えることにしたい。

<参考文献>

- 中村完 (1967) 「李丙疇編校『老朴集覽考』」『朝鮮学報』45 : 118-124.
李基文 (1975) 『韓国語の歴史』(藤本幸夫訳) 東京 : 大修館書店 (原著 : 1974 『改訂國語史概説』ソウル : 民衆書館).
李丙疇 (1966) 『老朴集覽考』ソウル : 進修堂.